

イギリス哲学会学会報告要旨

「ホッブズにおける民衆教化と大学改革」

久野真大（九州大学大学院法学研究院学術研究員）

本報告の目的は、従来のホッブズ研究で等閑視されてきた民衆教化と大学改革に関するホッブズの議論に焦点を当て、新たなホッブズ解釈を提示することにある。

従来の研究では、権力の直接的行使や処罰の恐怖に裏付けられた強制がホッブズ政治思想において大きな役割を果たしている、と強調されてきた。しかしながら、彼にとっての最重要課題は、現存するコモンウェルスを存続させ、その中で国内平和を実現し維持することであったはずである。では、その課題は、権力の行使や処罰の恐怖による強制のみによって、達成可能であろうか。

本報告で明らかにするのは、ホッブズが、コモンウェルスを存続させ、国内平和を実現し維持するための手段として、民衆教化と大学改革とを何よりも重視した、ということである。彼は、服従の責務を民衆に直接教化するための集会を開くことを提言している。とはいえ、ホッブズによれば、民衆は、政治的問題に関して自ら思考することなく、常に、大学卒の説教師やジェントルマンという知的エリートから多大な影響を受けている。そこで、ホッブズは、これら知的エリートの正しい教育こそが、結果的には、最も効率的な民衆教化になると考え、そのための方策として、大学改革を提言するのである。